

中央区の夏の風物詩

豊平川イカダ下り

豊平川イカダ下りの歩みを、札幌市豊平川イカダ下りを愛する会の菅原雄介会長（平成六年当時）のお話などをもとに紹介します。

イカダ下りは、「自分たちの手作りで何かを楽しみたい」という若者たちの手で、青少年週間の行事として始められました。

第一回大会は、市青少年婦人部の主催、区内の青年サークルの代表による「イカダ下り者委員会」の運営で、昭和五十年七月二十日に開催されました。十二艇四十二人が参加し、南十九条橋から東橋までの間でタイムレースを行いました。幌平橋から上白石橋間のコースになったのは、第三回からです（現在のコースは、幌平橋から南一条大橋）。また、イカダがアイデアいっぱい楽しさを競うようになったのは、第七回からです。

参加者も年々増え、いつしか「元若者」も多数参加するようになって、第十三回には二百四十六艇、

千百八十三人が出場、参加申し込みのために徹夜の行列ができた年もありました。第十九回からは親子の部も始まりました。

また、第五回から第十四回までは、市役所から幌平橋までバレードと前夜祭が行われ、大会を盛り上げました。イカダ下りの運営は、第三回からは実行委員を募集して毎年結成される、「豊平川イカダ下り実行委員会」に引き継がれました。しかし、毎回大会が終了した後に解散することから、平成五年には、通年的な取り組みや実行委員の確保などを目的に、実行委員OBが中心となり「札幌市豊平川イカダ下りを愛する会」が結成されました。



浅瀬ではハブニングが続出(第23回大会より)

（平成六年七月号・第一三回）